

琉球大学学術リポジトリ

応募作文

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター 公開日: 2012-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/22950

Ⅲ 応募作文

島の宝を守るために

沖縄県立八重山高等学校

3年 金城龍太郎

私の住む石垣島は、自然や文化、芸能にあふれた島である。デイゴの花やブーゲンビリアなど、きれいな花々が咲き乱れ、エメラルドグリーン色の海が島を包み込むように広がっている。また、世界有数の白保のサンゴ礁を始め、渡り鳥にとって大切な資源となっている貴重な湿地アンパルなどには、数多くの動植物が生息している。言わば、生き物たちの楽園である。そして、島のあちらこちらに広がるサトウキビ畑や、夏になると鮮やかな色をつけるパインやマンゴーなどの農作物は、島を代表する果物となり、私たちの暮らしを支える産業である。このような自然環境の中で生まれた、豊年祭やアングマーという伝統行事は、島特有の文化である。行事やお祝いの度に歌い踊り、皆で楽しむ習慣が地域文化の活性化に繋がっていったのだ。

ここ最近では、そのような石垣島の魅力に惹かれて訪れる観光客も年々増加してきている。大変喜ばしいことだが、それに伴っていろいろな問題も生じてきた。

まず、新石垣空港建設問題である。観光客の移動をより便利にするため、大きなジャンボジェット機を迎える滑走路を作る目的で、今石垣では、新空港の建設工事に着手し始めている。これは、石垣島の自然環境に大きな影響を与えるということで反対運動が長期間続いていた。第一に考えられるのは赤土汚染である。土地を造成して開発を進めていく際、建設中に大雨が降れば、赤土が川や海などに流れることが予想される。そうなれば、川や海に住む生き物に被害が出てしまう。サンゴにも悪影響を及ぼすであろう。そして、新空港近くにある、コウモリの棲んでいる洞窟もつぶされてしまう。新空港を建てることによって、自然の生態系が崩れてしまうのだ。しかし、こうもしてまで新空港建設に着手するということは、それほど新空港が今後石垣島にもたらす経済的効果が大きいためであろう。そのためには、少しの損失は仕方がないということなのか。

次の問題は、観光化が進むことによって起こる二次災害である。第一にはゴミ問題で、観光客が島の魅力である自然を汚してしまうことだ。故意ではないにせよ、自然とゴミが増えていってしまう。第二は観光ホテルの建設問題である。リゾート地やホテルの建設が進み、島の魅力である自然を破壊し、集客数は増えたが本来の目的が分からなくなっているのだ。

外部からの問題だけではない。島の住民の問題もある。伝統文化の継承が深刻なのだ。島の未来を担う若者が戻ってこないために、伝統文化を受け継いでいく人がいない。都会の人が田舎にあこがれてくるように、島の人も都会にあこがれて出て行ってしまふ。また、島であるために仕事が限られ、雇用先がないということが戻りたくても戻れない原因ともなっている。雇用問題を解決することは容易ではない。しかし、島が発展するためには若い人を集める島の魅力となる生活力も必要なのだ。そして私は、その生活力は石垣島の自然と文化を維持していくことで生まれると考えている。自然保護と文化継承が雇用につながり、島の若者の生活を支える力となるはずだ。実際に、独特の文化を観光に結びつけているハワイを例に挙げる。まず、「ハワイ」と言えば、たいていの人が、「耳にハイビスカスの花をかざし、首飾りのレイをか

けながら、「ビーチでフラダンスを踊っている女性」を思い浮かべる。しかし、本来のフラダンスは男性が踊る宗教的な儀式であり、決して観光目的ではなかった。だが、観光と伝統文化のイメージをマッチさせるために、本来あった文化とはかけ離れた新しい文化を作ることによって、観光産業でここまで発展してきたのである。

私たちの石垣島も特有の伝統行事がある。豊年祭や旧盆の際行われるアンガマーなども、うまく観光業につなげることはできるはずだ。だが、その前にやはり、この伝統を受け継いでいくことになる。「ないちゃー」と地元の「しまんちゅ」が、共に手を取り合うことが必要だ。外から来た人は、島のことが好きになったから住むものである。そのことをお互いが認め合い、協力して石垣島の文化を守り続けていくことがこれからは大切なのだ。地域の団結力が島を活性化させるのである。

私が、石垣島に取り入れたい政策が一つある。今、オーストラリアでは、国全体でホームステイの受け入れに力を入れているようだ。このことは、地元の人々と接することで、たくさんのことを体験でき、親しみが湧くため、滞在地での問題について訪れた人の関心をも高めることができる。そうすることで、島をよりよく理解してもらうことができ、リピーターにもつながる。最近では、心の癒しを求めてくる人が多いため、このような宿泊方法も面白いのではないか。さらに、この宿泊方法はホテル増設の歯止めになり、自然を不必要に壊すこともないのである。しかし、問題もある。各家庭にある一定レベルの受け入れ体制を持つために、市で対策をとる必要があり、目的や方法等を検討する必要があるからだ。現実的には厳しいところもあるが、一番自然な状態で、ヒトと自然と文化が共生できるユニークな方法ではないだろうか。私たち石垣島はこれまで、便利さを追求し、都会に目がいつの間にか、一番大切なものを見落としてしまっているのではないか。私たちの島にある、都会の人が惹かれる特別なもの。恵まれた自然と、そこで生まれ育った島ならではの文化をこれからどう残していくか。利益や便利さばかりを優先しては、いずれ島の環境も壊れ、経済もつぶれてしまう。そうなる前に早く、私たちはこの島の特別で大切な宝に気付くべきである。親から子へ、子から孫へと代々受け継がれていくこの宝を守っていこう。

『僕が生まれたこの島の唄を 僕はどれくらい知ってるんだろう
トゥバラーマもデンサー節も 言葉の意味さえわからない
でも誰より 誰よりも知っている
祝いの夜も祭りの朝も どこからか聞こえてくるこの唄を
いつの日かこの島を離れていくその日まで
大切なものをもっと深く知ってほしい
それが島人の宝』

私も、いつかこの島を出て行くつもりだ。県外の大学を出て、地域や国だけでなく国際的な政策を行う仕事に就きたいと考えているためである。私は、島を離れても何らかの形で島に携わっていきたい。いくら遠くに行っても、生まれ育った島を想う気持ちは変わらないのだ。どこにいても、島の宝を守り続けたいという想いは、子や孫へと受け継いでいけるはずだ。だから私も、この島を離れてくその日まで、大切なものをもっと深く知ってほしい。そして、石垣島の発展についてもっと深く考えていきたい。この島の宝をずっと守っていくために。

私の島の将来展望と課題

鹿児島県立徳之島高等学校

3年 前元功太郎

私が住んでいる徳之島を含む奄美群島は、鹿児島本土と沖縄諸島のちょうど中間に位置している。この地理的な理由から、文化、伝統などをさまざまな点において両地域の影響を受けて独自に進化させてきた。また、動植物など奄美固有、あるいは各島々固有のものもある。しかし現在、各島独自の文化があり動植物が生息するのと同時に、その島固有の課題もたくさんある。ここでは、徳之島の課題と展望について考えてみたいと思う。

まず、解決すべき課題の一つに製糖業の低迷がある。国内で生産される砂糖の多くは「甜菜」と「さとうきび」から作られている。中でも「さとうきび」については、徳之島は奄美でも一、二を争う作付面積と収穫量を誇っている。しかし、ここ数十年は「さとうきび」の作付面積は減少傾向にあり、その代わりに他の作物、特に「じゃがいも」に転作する農家が増えている。その原因として考えられるのはやはり収穫の早さと収益の差だと思われる。確かに、「じゃがいも」は植え付けから収穫までが四ヶ月程度と「さとうきび」が一年かかるのに比べてかなり早い。また、収益も大農家になれば、手取りで百万円ほど得る農家もいる。しかしその反面、デメリットも大きい。「じゃがいも」は産地が多く、価格に安定性が無いため、豊作の年は一キロ当たり百円を割り込むこともある。

それに対し「さとうきび」は政府の補助金などもあり、価格は安定している。また、「じゃがいも」は「じゃがいも」としてしか島から売ることができないが、「さとうきび」はそこからいろんな商品を島で作ることができる。例えば黒糖である。徳之島は、過去に二人の長寿世界一を輩出しているが、二人とも長生きの秘訣は「黒糖を毎日食べることと、黒糖焼酎を飲むこと。」であった。このように長寿の源である黒糖をもっと国内に広めないのは非常にもったいない。その他にも、搾りかすを肥料にしたり、きび酢を作ったりと「さとうきび」の利用価値は大いにある。工夫さえすれば「じゃがいも」に負けない商品価値を出すことは可能である。また、「さとうきび」の生産が減ると弊害もある。生産量が減ると製糖工場や、運送会社での雇用が減り、ますます島を離れる人が増え、地域経済の停滞につながる。

しかし、増産に転じさせるのはそう簡単な事ではない。島の「さとうきび」農家が新たな利用価値を見出し、長い期間をかけて地道に進めていくしかないと思う。

もし、先ほどのような商品化による販売が拡大されれば確実に島の経済基盤は安定するのではないだろうか。

また、もう一つ課題となるのは、観光をどう活性化していくかということだ。現在の観光は、来た人が自分たちだけで景勝地を周って終わりというのが大半である。しかしツアーガイドをつかった観光などリピーターを増やす工夫を進めなければならない。だが、その観光客も他島と比べて決して多いわけではない。そこで、徳之島を含む奄美諸島が目指しているのが世界遺産への登録である。登録が実現すれば、国内だけでなく、世界各地からの観光客の獲得が予想される。そうなれば自然と地元の経済は発展すると思う。農業と観光、この二つの柱があれば、磐石な経済基盤ができる。

しかし、登録には問題が残る。それは、島のいたる所にあるゴミである。私たちの高校ではそのようなゴミを少しでも減らそうと期末考査終了後に、全生徒が街中の清掃を行っている。やはり、島を変えていくのは私たち若者の力が大きいと思う。私たちが率先してボランティア活動を地道に進めていくことで、時間はかかってもゴミをどこにでも平然と捨てる雰囲気を変えていくことはできると思う。

しかし、世界遺産への登録を待つだけではいけない。インターネットなど使って島の魅力である「闘牛」や「アマミノクロウサギ」などの貴重な文化や生き物を多くの人たちに知ってもらうことも必要なことだ。それ以外にも山村留学などを活発に行うなど自分たちからもっと島をアピールすることもとても大切なことだと思う。

島の産業を活発にして、暮らしを豊かにすることも大切だが、文化を守り、伝えていくことも大事である。今、実際に島の方言である島口など島にしかない文化の一部は失われつつある。四十代以上の人は、ほとんど島口を使えるが、私たちの世代は逆に、ほとんどの人が使えない。だが、私たちの世代であれ、大人の世代であれどちらもこの徳之島のことを大好きであることに変わりはない。だからこそ私たちの世代が島口や、その他の島の文化をしっかりと受け継いで、私たちの次の世代へ繋いでいかないと島の魅力の多くは失われてしまうのではないかと思う。

この美しい自然、文化、伝統を私たちの世代で失うことなく、自分たち、そしてその次の世代のために島の産業と文化の伝承とを両立させていくことが、今、この徳之島に暮らす私たちが協力して解決していかなければいけない課題である。

私の島の将来展望と課題

鹿児島県立大島高等学校

3年 明山菜摘

私の生まれ育った奄美大島は、総人口 70,462 人の扇形という変わった形の島です。サンサンと照りつける太陽、木々のざわめきが心地良い波動を出し、祖母の家では、コトン、コトン、カラカラ、と大島紬を紡ぐ音が決まったリズムを打ち、夕方になると浜辺でシマンチュたちが三味線を片手に、シマ唄を奏でていました。そんな環境で育った私が、流れていく月日の中で、気づくことができました。それは、幼少期から目にしてきた私たちシマンチュの宝である海などの自然や、受け継がれてきた伝統行事などがだんだんと失われつつある、ということです。いつも近くに、ありのままの奄美を感じられていたのに、今では雑音に掻き消され、奄美は大切なモノを見失いつつあります。

そんな奄美群島には、天然記念物であるアマミノクロウサギやオオトラツグミ、ルリカケスやオオヤドカリ、絶滅危惧種であるリュウキュウアユやアマミヤマシギなどの生息地となっている点、固有種であるアマミセイシカやウケユリなど極めて多様な亜熱帯生態系や、サンゴ礁生態系を有している点などが、学術的に高く評価され、世界自然遺産の候補地となりました。私は奄美が、世界自然遺産登録の候補に挙げたと聞いたときは、自分の大好きな島が認められたという誇りと嬉しさで、胸がいっぱいになりました。しかし、世界自然遺産登録に向けた課題としては、「絶滅危惧種の生息地などの重要地域の一部はまだまだ十分な保護担保措置がとられていない」といった指摘をなされました。それと同時に、私は世界自然遺産登録を目指しているにも関わらず、奄美では、木々が伐採され、サンゴ礁は色を変え、島民の関心の無さが目立つと思いました。

さらに、私の目に映る奄美は、「本当に美しいのか」という疑問さえ生まれ始めました。まずはその疑問を解決するために、近くの海や川で、今の実情を知ろうと思いました。私が幼い頃から感じてきた海は、どこまでも広がるマリブルーに、潮風の心地よさがありました。日本にいるのに日本でないような異次元空間の世界に、いつも私は魅せられていました。しかし、今では浜辺にガラスが落ち、廃油ボール(コールタル)が増え、漂流して流れ着いたペットボトルには、見知らぬ外国の文字が書かれていました。私は、これらを見てなんとも言えない気持ちになりました。私は、人のためにする、やらされている、という義務感で島をきれいにしていきたいがありません。自分の家族や仲間を守るために行動すると思えば、人は強さを持ち、みんな輪を広げて動き出すと思います。まず、島民との意見・情報交換で島の将来を想像していく発想力が大切だと思います。奄美から海を守っていこうという活動を起こし、メディアなどによる精力的なPRをしていくことが、私たちの大切な海を守っていくことにつながる第一歩だと考えています。

また、川にはペットボトルやビニール袋だけでなく、家具や自転車などの日常用品でさえもが、散乱している状態でした。そしてその中を、ニシキゴイがたくさんの群れを成して、泳ぎ回っていました。そのニシキゴイは「自然に親しむ教育」の一環として、子供たちの手から放流させられたのだそうです。この移入種であるニシキゴイは、そこに一番住みやすい環境作り

を提供し、それらを私たちの手で守る責任があるということを改めて実感させられました。

1993年に世界自然遺産に登録された屋久島では、観光客・人口がともに大幅に増え、宿泊施設数は3倍、観光ガイド数も5倍近くになったそうです。観光業がそんなに盛んでない奄美も、屋久島のように世界ブランド化で知名度が上がれば、観光客も増え、航空会社の新規参入で運賃が下がり、さらに交通人口が増加し、Iターン・Uターンが増えるでしょう。そうすれば、財政ももっと潤っていくと思います。

奄美市の年間収入を276万円とすると、依存財源とされているのが、220万円(77.4%)自主財源が65万円(22.6%)となっています。依存財源の多くは国・県からの補助金・交付金または地方債だそうです。そして、国や県から多額の借金をし、過去に借りた借金の返済が続いているのが現状です。市民一人あたりが抱えている借金は約82万だそうです。財政圧迫の主な要因として①交付税や補助金の減少②人口減と高齢化などに伴う扶助費の増加③借金中の公共事業実施④借金を抱えながらの合併などがあげられています。対策としては、支出を抑えることが必要であると思われます。それには、職員数や特別職、人件費や各種運営事務費、公共事業の見直しで借金を減らしていくことが必要とされています。さらに、公共事業の利益に頼るばかりではなく、島独特の地場産業である大島紬と黒糖焼酎をもっと活性化することで、自主財源が増え、依存財源を減らしていくことができるのではないかと私は思います。

大島紬の歴史は、約1300年前(西暦661年)にまでさかのぼり、わが国染色織物の最も古い伝統を持つものだといわれています。細かな柄、深い色、独特な手触りが特徴で、古代染色技術と民芸品的古典の渋味が高く評価されて、今日では、文化財的貴重な織物となっています。奄美群島の基幹産業としての重要な地位確保をしてきましたが、大幅な減少傾向にあり、《生命産業》と呼ばれていた紬産業が、今では支えられる産業になってしまいました。二万人前後いた従業者は、現在六千人にまで減り、若者離れしてしまった結果、現在の織工の平均年齢は、六十代後半が占めています。生産反数も、昭和50年に264,290反だったのに対し、現在では17,732反と、246,558反も減少しているのです。生産額も、286億円に達していた時期に比べ、今となっては、十分の一の約27億円にまで減っているのです。産地渡しの価格も当時の三分の二ほど下落しています。その背景に、大衆の着物離れや若者向けのデザインではないこと、安価な韓国産の競争による類似品の出回りが、影響を受けたと考えられます。そのほかに、松実、ヒルギ、テーチ木の煎汁の独特な臭いや、手間のかかる作業が若者の人手不足につながっているのかもしれないと私は思いました。奄美の年間約三万三千反の生産量がこれから先、三万反を割ると産地として成り立たなくなる恐れもあるのです。大島紬の売り上げも必要ですが、一番大切な事は、伝統を守り、私たちの代でその歴史を終わらせてはいけないということだと思います。今の紬産業は伝統だけでは、やっていけないところまできています。私は、それを悲しいと感じ、祖母や母に紬の小物を、母の日や特別な日にプレゼントしよう、と決めています。私自身も、紬の小物をいくつか持って、使用したりしています。私には伝統を引き継ぐ意思があります。伝統が、騒がれている今の時代に生まれたからこそ、私たちは、この問題と向き合い、考えていく必要があるのです。伝統は、次世代の私たちが引き継ぎ、守るものです。

もう一つの島独特の産業である黒糖焼酎は、健康ブームのため一時期、売り上げを伸ばしましたが、今では、沈静化状態に戻りつつあります。また黒糖焼酎にはもう一つ問題があります。それは、原料のすべてが、島外産であるということです。黒糖焼酎は、シマ唄と同様に奄美の文化と生活に根付く大きな存在でした。昔は、黒糖焼酎の生産を奄美だけに限り、認めたそう

です。それは、原料のサトウキビ、黒糖も奄美で生産されていたからです。以前は、地元農家から直接、黒糖を買い、黒糖焼酎を造っていました。それは、生産規模が小さく、地元産の原料で十分に、まかなえていたからです。しかし、59年以降、奄美の黒糖生産は減少に向かいます。現在の黒糖焼酎メーカーは二十七だそうですが、利用率は、数%にとどまり、沖縄産のほかに、ベトナム、ボリビアなどの外国産も使われているそうです。沖縄で黒糖生産が維持され、生産コストが安いのは、復帰直後から、沖縄振興開発特別措置法(沖縄振興特別措置法)で国の補助があったからです。黒糖焼酎業界には県大島紬技術指導センターのような研究機関はなく、新開発に踏み込む会社も少ないのだそうです。

昔、奄美の先人に丸田南里(まるた なんり)という人がいました。1851(嘉永4年)に奄美名瀬で出生し、14歳の時に、長崎のグラバー庭園で有名な英国商人グラバーに随行して、幼い頃の外国に渡りたいという夢を叶えるため、英国に密航した、と言われています。1875(明治8年)に先進諸国から帰郷後、有志に呼びかけて黒糖自由販売運動を全島に広めていきました。1878(明治11年)には黒糖販売を独占していた「大島商社」を解体させ、署名運動などの努力が実り、砂糖の自由販売を勝ち取りました。また、島民に自由性や学問尊重の気風を醸成させ、明治初期の奄美大島で「生活改善」・「自由・平等」を叫び、奄美の黎明近代化に大きな貢献を果たしました。そして今でも、彼の功績は広く語り継がれています。過去には、こういった島のために力を尽くした先人達が、奄美を熱く思い、命がけで守ろうとしていました。私たちも、こういった先人達の守ろうとした暮らしや文化、自然や自由に感謝するとともに、私たちが破壊し、失ってきたモノを取り戻していかなければならないのです。この島に求められるモノは〔共存共生〕です。ともに生き、生かされていることを感じ、環境面・経済面・伝統面においても、行政や学校や企業も巻き込み、盛り上げていく必要があると思います。私はこの作文を書くにあたって、学ぶことができました。それは、〔なぜ〕を追究し、たくさんの答えを探すようになったことです。私の周りには、奄美のために何かしたいという希望に満ちた老若男女たちがたくさんいます。まずは、人の目を見て、コミュニケーションをとり、いいものは引き継ぎ、悪いものは改善し、私たちの子や孫に苦勞をかけない未来作りをすることがこれからの重要な課題であると思います。

奄美のこれからを考える ～世界自然遺産登録を目指して～

鹿児島県立大島高等学校

3年 里 真美

私の生まれ育った島は鹿児島県の南に位置する奄美大島という島です。人口は約 13 万人。雨が多く亜熱帯に属するこの島は、一年を通して木々が青々と生い茂っています。山にはアマミノクロツサギやオオトラツグミなどの天然記念物を含む多数の動植物固有種が存在し、一方、海はサンゴ礁が形成された美しい海が広がり、毎年夏が近づく頃になると産卵期を迎えたウミガメが姿を見せます。このような島の自然は世界的にも評価されていて『東洋のガラパゴス』とも呼ばれています。

また、夏の暑い日には島の部落に住む方々が黒糖焼酎を片手に島唄を唄いながら浜辺で夕涼みをする光景が見られます。生活の便利さという点では、はるかに本土には及びませんが、私はこの島が大好きで、この島の豊かな自然と独特の伝統文化を誇りに思っています。

(世界自然遺産登録をうけて)

現在、「奄美大島を世界遺産に登録しよう」という取り組みがなされています。私はこれ程に豊かな自然が存在するこの島ならきっとすぐに登録されるだろうと簡単に考えていました。しかし、実際はそんなに甘いものではないのです。2003 年、環境省と林野庁によって同じ候補地としてあげられた北海道の「知床半島」は着々と遺産登録にむけて活動し 2005 年 7 月、晴れて「白神山地」「屋久島」に続く我が国 3 つ目の世界自然遺産として登録を果たしました。そこで私は、優れた自然形態や独特な文化を持つという面では「奄美大島」も「知床半島」には負けていないはずなのにどうして「知床半島」のように世界遺産登録に踏み出せないのかという疑問を持ちました。

(登録を受けられない理由)

調べてみますと、「奄美大島」も「知床半島」もやはり負けず劣らず自然形態は優れており、どちらも世界遺産に値するほどの自然的価値があるということが分かりました。

しかし、その 2 つの地域には決定的な大きな違いがあったのです。それは、「保護活動がいかになされているのか」と言うことでした。すでに遺産登録を果たした「知床半島」では住民自ら保護活動を実施していたり、行政機関による「知床世界遺産科学委員会」や「知床国立公園適正化検討会議」の設置など数々の保全活動のための対策がなされたりしています。このように「知床半島」では住民自らが自分の周りの自然の現状を知り、今何をすべきか考え、行政と共に保護活動に取り組むことによって自然遺産登録を勝ち取ったのです。一方「奄美大島」における保護活動はそんな知床よりもはるかに遅れをとっているように思えます。

(奄美の現状と自然遺産登録の必要性)

実際、奄美の自然が今現在どんな状態で、どんな自然保護活動がなされているのか、ということは生まれてから 18 年間奄美に暮らす私でさえも具体的には知らないと言うことに気が付

きました。ただ「美しい森林があり海がある」ということや「世界的にも珍しい貴重な生物がいる」と言うことなどだけで奄美の自然を知っているような気持ちになっていたのです。いざ調べてみると、奄美の森は自然環境へのダメージを考えないで行う大規模な開発や森林伐採による森林破壊が深刻化しており、そして、それに伴う野生生物の減少、また、オニヒトデの大量発生や高水温による白化現象のためにサンゴ礁が死滅してしまうなどという問題から、「マングース」をはじめとした外来種の問題まで島の自然が抱える問題の多さにとても驚きました。そして、それらの問題のどれをとっても解決にたどりつくのはとても難しく、まだ具体的な策がなされていないか、あるいはマングースバスターズのように成果が完了できていないというのが現状です。

さらに、島にはこれといった産業がなく、仕事がありません。そのために私のような高校生は卒業後、島で就職という形を取るのはかなり少なく大半の高校生が本土で就職・進学をします。その事が原因の1つとなり島の「過疎化」が進んでいます。

このような問題を考えた上でやはり「世界遺産登録」は必要だと思います。遺産登録にむけて島の住民が自然と向き合い、島の自然を住民自ら考えることができるからです。また観光業1つにしても、地域の経済と環境保護は結びつきが深く、遺産登録にむけて保護活動を行うことは、今後の奄美を様々な面から考えると言うことがきるという点においても大切だと思います。

(もし世界遺産登録されたら)

最初に「奄美大島」が世界遺産されたときのメリットをあげます。まず「世界遺産」というブランド化で「奄美大島」の知名度が上がるということです。

たとえば、甘酸っぱくておいしい私も大好きな奄美の特産品「たんかん」にしても「世界遺産登録地で育てられたたんかん」となると「奄美のたんかん」は全国の人の目を引くと思います。

そして、知名度が上がると同時に観光客の増加と観光業の発展が期待できます。すでに登録を果たした「屋久島」を例としてみても、同じ鹿児島県の離島にもかかわらず、観光客数の増減の差は歴然としています。「屋久島」では登録後、宿泊施設数は3倍近くに、観光ガイド数も5倍にまで増加したそうです。さらにUターン・Iターンによる人口の増加も見られます。

そして、何よりも人々が自然について考え、奄美の自然を再確認することのきっかけになると思います。実際に私自身が「奄美大島がなぜ世界遺産に登録されないのか」という疑問を持って調べたり地域の方々に話を伺ったりしたなかで奄美の自然について自分が初めて知ったことの多さにとても驚きました。おそらく、私と同じように島に暮らす人々は「奄美大島」の自然について知っているつもりでも、実際は知らないことが多いというのがほとんどだと思います。よって、このような取り組みがなされることで、地域や学校、身近な生活のなで環境について考える機会が増え、保全活動も促進されると思います。

しかし、この裏にはいくつかのデメリットも存在します。一番大きなものとして、観光を優先するあまり、自然保護がおろそかになってしまい、自然破壊を招くことになってしまうことです。このことは、すでに世界自然遺産された地域の中で数多くの地域で問題となっています。世界自然遺産第1号として有名な「ガラパゴス諸島」では、世界からあまりに注目されすぎたため、観光客の増加が激しく、地域社会の急激な変化や自然環境の過剰な利用などが問題とさ

れています。一度壊してしまった自然を元に戻すのはとても難しいのです。そのためにも遺産登録は慎重に行うべきだという声も多くあげられています。

このような、メリット・デメリットを考えた上でも、やはり私は「奄美大島」が世界遺産登録されると「よりよい奄美大島」になる可能性は充分にあると思えます。すでに登録された地域の成功例や失敗例から学び、観光客をどのように規制するかなどを事前に対策を考えることで先に述べたデメリットを減らすことは可能です。

(島の自然と暮らし)

今、現在も奄美の木々は切り倒され自然破壊は進んでいます。今や、貴重で保護活動が必要とされている「リュウキュウアユ」は昔、群れをなして泳いでいる光景があちこちの川で見られたそうです。野鳥の越冬地だった住用村のマングローブは観光客のマングローブツーリングのために悪影響が及ぼされています。数十年前の奄美の自然を知る人々が奄美の自然の魅力を感じなくなりつつあるのです。

「奄美の自然を保護しよう」といっても、その背景には様々な解決すべき問題が山積みされており、なかなか前に進めないというのが今の奄美の現状なのだと感じます。

私が話しを伺った人の中に「奄美大島はそっとしておくだけで『金の価値』が出てくる島になると私はずっと言ってきた。」ということ述べる方がいました。奄美の自然を本当に知っているのは70代・80代の島の先人達かも知れません。その方は、幼い頃から「山の木を1本切るのにも自然が私たちにくれたものだから考えてから切りなさい。」「小さな貝は大きくしてからとりなさい。」などと言われてきたそうです。

私は、この話を聞き、島の人たちは自然を尊び、自然の恩恵を受けて暮らしてきたのだと思いました。島の文化を見てもそうです。里山から切り出してきたシャリンバイをもとに「泥染め」を行って、奄美の伝統的な織物である「大島紬」は完成します。さとうきびから黒糖を生成し、それを発酵して作るのが有名な「黒糖焼酎」です。また、島の人々は古くから豊作に感謝して行う「八月踊り」や「平瀬マンカイ」などのような自然と関わる伝統行事を行ってきました。このようなことから、奄美の人々は、奄美の自然と密接しながら生活してきたと言えます。

(最後に)

このようなことをふまえた上で、「世界遺産登録」は奄美の人々が自然とどのように付き合いってきたか、そして、これから自然とどう関わっていくかを見直す最大のチャンスだといえると思えます。それによって「島の未来」を守ることの第一歩につながるのではないのでしょうか。

「世界遺産登録」にむけて今、現在できる保全活動を考え、できるだけ早く問題を解決することが今の私たちに出来ることだと思えます。そして登録された後、いかに奄美の自然を守りながら人々の生活を成立させていくか、を考えていくことが大切だと思います。せっかく、こんなにすばらしい島に生まれたのだから、私は自分の手でこの島の自然と島の未来を守っていきたいです。

私の島の将来展望と課題

鹿児島県立大島高等学校

3年 佐東 綾乃

私の住む奄美大島は南西諸島の北琉球に属し、亜熱帯気候の自然豊かな島である。海では多種多様なサンゴや魚たちが、何とも言えない幻想的な世界を作り出しており、野鳥が飛び交う山では、山の守り神と言われるハブが目を光らせている。

また奄美の豊かな自然のすぐそばには、名瀬のような近代的な町が広がっている。「奄美」というとドラマや映画で見られるような、南国風民家の町並みを想像する人が多いようだが、今の奄美ではそのような町並みはほとんど見られない。奄美の中心地である名瀬の町では、大手スーパーや商業ビルが建ち並び、どんどん都市化が進んでいる。そのおかげで、島に住む人たちの生活は、以前とは比べものにならないほど便利なものとなった。だが、その背景には様々な問題が発生している。

人々は都市化を進展させるために山を削り、海を埋め立てて土地を広げてきた。そして今もなお奄美の都市化は進んでいる。名瀬の町のすぐ近くには金作原という原生林が広がっており、そこには日本最大のシダ植物であるヒカゲヘゴや、特別天然記念物であり「生きた化石」とも呼ばれるアマミノクロウサギなど貴重な生物が生息している。だが今、環境省などの調査により、それらの生物の生息数が減少していることがわかっている。

それには、奄美の都市化による土地開発の拡大が関係しているのではないかと私は考える。人々は都市化を進めるために山を削って土地を拡大してきた。人間にとってそれは土地も広がり道路も増えて生活が良くなることに繋がるが、動物たちにとってはそうではない。山に生きる動物たちにとって、人間のその行為は住かを失うことに繋がる。また、わずかに残された自然の中に様々な動物が密集することになり、捕食性の動物に見つかりやすくなる。よってこれは島の自然に適応してきた動物たちにとって、種の存亡という問題にまで発展する。また、山に道路が通ることによって動物たちが交通事故に遭い、死んでしまうことも現実が増えていく。この2つのことから、奄美の都市化と動物の生息数の減少に関係があると考えられる。

この島は今もなお都市化が進んでいる。おそらくこれからも都市化が止まることはないであろう。都市化がさらに進んだ将来、この島は一体どうなるのだろうか。まず何よりも名瀬の街にはスーパーや飲食店など、様々な店が増えるであろう。店が増えれば、その分働き口も増え、また買い物などの生活面も便利になる。よって名瀬の街の都市化とは、そこに住む人たちにとっては利便性・収入の面において、より良い生活を送れるということにつながるのである。

しかしここで、他の地域に目を向けてみると、様々な問題が生じてくる。1つは地方と名瀬とをつなぐ道路の増加と拡大である。山の中に道路を造るには、もともとそこに生えていた木を切らなければならない。そうなれば、先に述べたように野生動物たちへの負担は大きくなっていくだろう。また自然環境だけではない、さらなる問題として小さな集落の過疎化が挙げられる。

奄美の島口に「シマ」という言葉がある。この言葉はもちろん奄美大島を指すこともあるが、たいていの場合は「集落」という意味で使われる。この言葉の通り、奄美大島において集落と

は1つの小さな島だ。例えば、諸鈍シバヤや平瀬マンカイのように1つの地域にしか見られない文化が多数存在する。よって、小さな集落の過疎化とは、そのシマに存在する文化が消滅する危機を表すのである。

ではこれらの問題を解決するためには一体どのようにすればいいのか。現在も過疎化の一途をたどっている集落の大きな原因は、仕事が無いこと、またそのために若者がどんどんと集落から出て行ってしまうことである。人口の少ない小さな集落ではほとんどの人が林業や農業のような第一次産業で生計を立てている。しかし平成16年度の1人あたりの郡民平均所得200万円に対し、農業専従者1人あたりの生産農業所得は85万2000円であり、その差は114万8000円もある。このことから、第一次産業で生計を立ててゆくのは非常に困難なことだと言える。しかし、昔は第一次産業だけで家計を支えることができた。それはなぜか。それは島の人の生活のほとんどが自給自足で成り立っていたからではないだろうか。

奄美大島のすぐ近くに、加計呂麻という島がある。この島には昔西方村、実久村、鎮西村という3つのシマが存在していた。物資を買いに本島の古仁屋の街に行くには、船を使わなければならないし時間もかかる。そのことからこの3つのシマでは周りとの交易が、本島に比べて貨幣の必要性が低かったと考えられる。だから、ある種の閉鎖区域の中で自給自足の生活が成り立っていたのである。

しかし加計呂麻の3つのシマは、昭和31年古仁屋町と合併し瀬戸内町となった。その20年後には、大島海峡によって隔てられていた加計呂麻と古仁屋の間にカーフェリーが就航し、加計呂麻と古仁屋間の行き来が簡単になった。しかしそれにより、外とのやりとりが増えた加計呂麻では貨幣の必要性が増加してしまった。つまり今までの自給自足の生活を成り立たせることが難しくなってしまったのである。故に高い所得の得られる職に就くため、または個人の学歴や職業観の多様化により、若者はどんどんシマを出て行ってしまっているのである。

しかし今さら自給自足の生活に戻れといわれても、戻ることは不可能に近い。よって文化の消滅を阻止するための方策として、シマの個性を残しながらも収入が得られる、そのシマならではの特産物や仕事を作ったらどうかと考えた。

私自身、今加計呂麻の中の秋徳という小さな集落に実家があるが、そこの良いところは何よりもまず自然が身近にあることだ。家にいても波の音が聞こえ、家の近くではルリカケスやリュウキュウコノハヅクのような野鳥の姿を見ることができたりする。この豊富な自然をうまく活用して、宿泊施設の開設やエコツアーを組むなど、「シマならではの」ものを作る。それによりシマの経済と人々の生活とを潤わせていくことができると、私は考える。

このように、自然環境や生き物たちへの配慮と、地域文化消滅への危機を克服していくことで、この島は理想的な将来を手にすることができるのではないだろうか。私の考える理想的な将来。それは人も残り、文化も残り、自然も残る奄美大島である。

奄美大島では今、奄美を世界自然遺産に登録しようという動きがある。もし奄美が世界自然遺産に登録されれば、まず地域の自然は保護される。故にそこは動物たちの宝庫になるに違いない。また奄美の知名度が跳ね上がることはいうまでもない。知名度が上がれば、観光客の増加が考えられる。国内の観光客だけではなく、外国からの観光客も多く見られるようになるだろう。そして、奄美の特産物に「世界遺産」のブランドが付くことになる。そうすれば観光客のみならず、インターネットの販売など様々なところからの利潤が期待できる。これらのことから奄美大島の世界自然遺産登録への活動は、理想的な島の将来への先駆けといえる。

しかし、物事にはメリットがあれば必ずデメリットがある。例えば、奄美が世界自然遺産に登録されれば、観光客の増加が引き起こすゴミの増加に対応しなければならない。奄美ではポイ捨てされたゴミを山や道ばたでよく見かける。それを見た観光客がさらにゴミを捨ててしまえば、環境に与えるダメージは大きくなるだろう。私は徹底的な街の美化や、ゴミの投棄禁止看板を設置するなど、今から対策をしていく必要があると思う。あるいは、人が山にアマミノクロウサギを見に行く、そのこと自体がダメージを与える場合もある。遠方から来たのだから、どうしてもクロウサギを見たい、そうやって一晩に何度も山中に車を走らせれば、それだけ交通事故による野生動物の被害が増えるだろう。これは入山規制や時間帯の徹底管理などで対応できると思う。いかにしてデメリットを抑えながら、メリットを伸ばしていけるのか、これからの対処はとても大事である。

では、当の島民たちは奄美の世界自然遺産登録をどう思っているのだろうか。その現状を調べるために私はアンケートを行った。市街地の店など、人が集まるであろう場所にアンケート用紙を設置してもらえるように依頼し、店に来た全ての人を対象に奄美の世界自然遺産登録に関するアンケート調査を行った。

回答してくださった 101 人のうち、世界遺産登録を知っていると答えた人は 76 人、知らないと答えた人は 25 人であった。また、奄美は世界遺産に登録できると思うかという質問に対して、できると思う人が 50 人、できないと思う人が 51 人という結果になった。この結果をまとめてみると、島の人たちは奄美の世界自然遺産への登録について知ってはいるが、登録できるかどうかは微妙なところだ、と考えているようだ。また、このアンケートで奄美は世界自然遺産に登録できないと思う人たちの回答には、街の美化が必要、遺産登録への関心が薄い、奄美の人の島に対する関心が低いから、という回答が多く見られた。

このことから私は、奄美に今もっとも必要なことは、島に住む人たちが島のことをもっと知ることではないかと考える。昔、島の先人たちは島を理解し、自然を恐れることで島の自然と共に生きてきた。よって、今奄美大島に住む一人一人が島を知り、将来のために何か行動を起こすことで、さらに都市化が進んだとしても島の自然と共に生きていくことができるのである。将来の奄美が、人も、文化も、自然も残るすばらしい島であって欲しい。

私の島の将来展望と課題

鹿児島県立大島高等学校

3年 柳 奈保子

最近、南の島と言えば沖縄、と何かと沖縄がブームです。確かに沖縄は素敵な島で、私も大好きですが、私の住む奄美大島もまけてはいないと思います。奄美群島は鹿児島県に属していますが、そこはまさに南の島で、位置的にも沖縄寄りということで、沖縄とごっちゃにされてしまいがちです。

しかし、本土と沖縄、その間の中途半端な場所に位置し、過去、そのどちらからも支配を受け、影響を受けてきた奄美では、本土とも沖縄とも異なる奄美独自の文化が生まれ、現在まで受け継がれてきました。

奄美には古い歴史がありますが奄美に住む人々は、その古い大切な過去や先人たちの想い、教えなどを、歴史資料としてではなく、島に今でも残る唄に込め、親から子へ、子から孫へと語り継いできました。また、戦後間もない奄美では、「本土並み」が叫ばれ振興開発ばかりに気を取られていたのに加え、さまざまな面（例えば文化やその歴史など）で本土への劣等感があり、自分たちの昔から受け継がれてきた独自の文化などは放っておいて、とにかく本土に追いつこうとしていました。なので、当時の奄美には、奄美に関する歴史資料がほとんどありませんでした。

そんな奄美のために、日本中を歩き回ってその歴史資料を探し集めた人がいました。それは、作家としても有名で、「死の棘」をはじめとする数々の名作を世に残した島尾敏雄さんという人です。

私が今回、奄美についてさまざまな事を調べている中で、島尾敏雄さんが考案した「ヤポネシア」という言葉と出会いその意味を知り、衝撃を受けました。まず、この島尾敏雄という人物について少し説明します。

島尾さんは、横浜市出身の作家ですが、第二次世界大戦時、海軍特別攻撃隊十八震洋隊隊長として、奄美大島加計呂麻島呑之浦に駐屯していました。しかし、出撃のないまま終戦。また、当時苛酷な戦時中にも、島の人々の生命や生活への配慮をおしなかつたため、人々の彼に対する信頼はたいへん厚く、「ワーキャジュウ（我々の慈父）」と呼ばれ、「生まれかはんぬちゅう（人間として立派な生まれの極まりの人でしょう）」という彼を表す言葉や、「あれみよ島尾隊長は人情深くて豪傑で・・・あなたのためならよろこんでみんなの命を捧げます」という歌ができるほどに敬愛されました。戦後、駐屯地の女性と結婚し、本土のほうでしばらく勤めますが、その後、妻の病のため、妻の実家のある奄美へ帰島し、現在の鹿児島県立奄美高等学校で講師をしながら執筆活動を続けます。また、昭和 33 年に奄美日米文化会館を母体として鹿児島県立図書館奄美分館が設置された際に、奄美に図書館を誘致する計画を立てた島尾さんが初代館長を務めることとなります。そのときにも彼は、実にまじめで誠実、そして常に相手のことを第一に考える寛容な人であったため、近隣の人々から様々な相談事を受けていたそうです。さらに、彼の図書館長としての業務を越えた様々な図書館活動は、日本の離島を抱えた地域における図書館活動のあり方に影響を与えています。また、図書館活動を通じた人的交流が

島尾さんの執筆活動にも大きな影響を与えました。

そんな島尾敏雄さんが「ヤポネシア論」により、世に新風を巻き起こしました。

「ヤポネシア」という言葉は、ラテン語で日本を意味する「Japonia (ヤポン)」と群島を意味する「nesia (ネシア)」を掛け合わせたものです。これは、大陸ばかりに目を向け、中央集権を重視し、東北や南方は軽視して見下すというそれまでの社会的な風潮の中で、彼の、こうした考えはおかしいのではないか、という疑問により考え出されました。

「ヤポネシア」とは、日本という国は一つの陸続きの国ではないけれど、北から南までのすべての島々を含めてはじめて日本となるのであって、一つの列島であり、大陸だけでなく、歴史の転換期における南島からの波動を重視するという考え方です。南島、つまり、奄美・琉球弧が変わることから日本は変わっていく、ということを経験した島尾さんは島の人々に伝え、もっと自分たちの島の文化や歴史に誇りを持ち、大切にしてほしいと願ったのでしょう。この「ヤポネシア論」は、バブル崩壊後以降、続いてきた日本の不況を変えるきっかけになるのではないかと私は思います。

では、戦後、この「ヤポネシア論」が世に伝えられて以降、私たち南島では何が変わってきたのでしょうか。終戦後しばらく米軍に支配された後、奄美群島は 1953 年に、沖縄は奄美より少し遅れた 1972 年に、日本に返還されました。これらの島々は当時、戦後の努力により目覚ましい成長を遂げる本土にかなり遅れをとっていました。そんな本土の振興を図ることに力を注いでいた日本政府は、祖国復帰を果たしたばかりで、本土の発展についていけないこの南の島々の世話にまで手が回らず、そんな島々の発展のために、「本土並みの生活水準」を目標とする奄美群島・沖縄振興開発特別措置法をそれぞれに制定しました。そのおかげで島々は、本土との格差是正に向けて様々な発展を遂げました。島民の生活環境は整えられ、現在では、島民の生活は本土とそう変わらないほどです。

1954 年に制定されて以来、5 年毎に延長されてきた奄美群島振興開発特別措置法（奄振法）により、道路や港湾など社会基盤は整備されました。しかし一方で、大島紬などの地場産業は衰退し、公共工事への依存度は深まっています。奄美市の年間収入の 4 分の 3 が依存財源が占めている中、その 4 分の 1 しかない自主財源のほとんどが公共事業によるものとなっています。奄美の財政は、今、危機的状況にあります。毎年、国・県からの借金を返済していますが、それと同じように毎年、借金をしているので、状況は一向に良くなりません。

奄美の経済状況については、交通が不便で物価が高く、仕事が少なく、住みにくい奄美から離れる若者が大変多く、それにより高齢化が進み、医療福祉費が増加し、さらに借金を抱えなければならない、という悪循環が生まれています。

そんな奄美で暮らす私は、離島のハンデが大変大きなものであることを実感します。そんなわけで、奄美は財政破綻の一步手前まで来ています。今の状態でも大変なのに、こんな奄美が財政破綻となってしまったら、いったいどうなってしまうのでしょうか。国に管理されることで市民は、過去にあった黒糖地獄ほどではないでしょうが、公共サービスは低下し、反対に税金などは増加していくことで、経済的に大変苦しい生活を強いられることなのでしょう。そして、さらに最低な悪循環が生まれ、市民は先の見えない島の未来に不安を感じながらの生活を送ることになるでしょう。

そんな状況に陥らないようにするためには、自主財源を増やしていくことで、市の年間収入を増やしていく必要があります。そこで必要となってくるのが、島の産業であると思います。

奄美には、主な産業として、公共事業などを担う建設業と、大島紬や黒糖焼酎の有名な製造業があります。1985年くらいまで、これらは肩を並べる産業でしたが、大島紬の売れ行き不振に伴い、次第に製造業が落ち込んできました。その落ち込み分を建設業が補ってきたことで奄美の経済はなんとか保たれてきました。しかし、この建設業だけでは、市の自主財源の拡大はあまり期待できませんし、建設業が発展していくことは、奄美の美しい自然を破壊することにつながると私は思います。やはり、大島紬や黒糖焼酎などの製造業の発展に期待するしかないでしょう。この2つの特産品の売り上げを上げることも大切ですが、これらとは別の新しい奄美の特産品をつくってそれを製造業として売り出していくことも1つの方法だと思います。

さらに、観光業をもっと発展させていくことも必要となってくるでしょう。しかし、沖縄の観光業のために本土の大手企業の参入などにより、美しい海や浜をどんどんリゾート化をはかってきた結果、観光客が増え、観光業としては成功していますが、果たしてその海や浜に昔の面影はあるのか、それは本当に成功であるのかという疑問を持ちます。また、奄美は航空運賃が沖縄に比べ高いため、沖縄と同じようなリゾート地をつくったとしても、おそらく沖縄と同じように成功することは難しいでしょう。

そこで今、奄美では、「癒しの島」を目標に「奄美ミュージアム構想」というものが発案されています。私は、これは沖縄とごっちゃにされがちな奄美のイメージを変えていく良いきっかけになると思います。しかしそのためには、まず、奄美の知名度を上げることが必要です。現在、奄美を世界自然遺産登録しようという活動があります。奄美が世界遺産に登録されれば、屋久島などのように有名になると思います。

この2つの計画を成功させられれば、奄美には仕事が増え、そのおかげで若者が増え、活気が戻るでしょう。そんな将来を生み出すためには、奄美の人々が自分たちの住む島のことにもっと興味を持ち、島のことを知り、奄美の人々だけでなく本土の人々にも、島をもっともっと好きになってほしいと思います。

私が今回奄美について調べてみて気づいたことは、自分は奄美に住んでいるから、島のことは何でも知っている、と勝手に思っていたけど、実は奄美のほんの一部を知っているだけだったということです。自分の地元のことについてなどは、何かきっかけがないと実はあまりよく知らないということに気づいたり、調べようとする事なんてありません。伝統的な行事や美しい自然が失われつつある現在、奄美ではそういう人が多いはずです。

これから奄美の魅力を生かした島づくりを行っていくには、そんな失われつつあるモノたちを守る義務のある私たちが奄美のことをよく知る必要があります。私たちが、先人たちの意思を継ぎ、積極的に行動していくことが奄美のよりよい未来につながるとわたしは思います。